

な来世観を伝える」、「死後は不明であり、不安があるが阿弥陀仏の救いが必ずあることを伝える」、「死後について学ぶ必要性の強調」であった。大学生の回答で固有のものは、「特定の宗教に偏らない来世観を伝える」、「何も残らないと思います」、「死ぬことを考えるな」、「火葬・埋葬されることを伝える」、「苦しみからの解放と考える」、「安らかに眠る」、「生命のサイクルの一部と伝える」であった。両者に共通した回答は、「人々の心に残ると伝える」、「死後どうなるのかは自分が決める」、「分らないので不安だから、今を大事に」、「一緒に考える」であった。

ビハーラ活動者に最も多い回答は、「浄土真宗的な来世観を伝える」で五一% (二〇人) であり、次いで「死後は不明であり、不安があるが阿弥陀仏の救いが必ずある」が二八% (一人)、「わからない、不安、今を大事に」が八% (三人)、「共に考えたり、教わるのを勧める」が八% (三人) であった。大学生に最も多い回答は、「わからない、不安、今を大事に」が三〇% (三六人) であり、次いで「特定の宗教に偏らない来世観を伝える」が二二% (二六人)、「人々の心に残る」が一二% (一人)、「死後は何も残らない、今を大事に」が一% (一人) であった。

ガン患者への来世に関する対応として、ビハーラ活動者は真宗的な応答が約八割と最も多く占めているのに対して、大学生はそのような応答はみられず、むしろ「わからない、不安、何も残らない、死ぬことよりも生きる事を考える」といった応答が最も多くみられた。このように大学生においては死後につい

での不安感や虚無感、拒否などもみられ、ビハーラ活動者とは大きく違っている。

一方で、大学生においても「特定の宗教に偏らない来世観を伝える」と答えた人が二割強いた。大学生における来世観は、「生まれ変わる」「天国へ行く」などの新しい世界へ生れていくものと、「人々を助け、見守る存在になる」などの現世における霊的存在への移行などがあつた。これはビハーラ活動者の「浄土へ行く」や「仏となつて、現世の人を導く」といった来世観と類似する点が見られた。

これらより、宗教者は生死の問題を解決しており伝道活動へつなげている。一方で、大学生は生死の問題について不安感などを抱えているが、折衷的な来世観を持つ人もいることが明らかとなった。今後、宗教性を高めることで、生死の問題を解決するためには、各宗派の宗教者と一般人との対話を通じて、相互理解と発展が必要である。

パネルの主旨とまとめ

藤 能成

日本の宗教研究者の多くは、日本は非宗教的社会だとして、日本人の宗教性を低く評価する。第二次大戦後、憲法二〇条において公教育における宗教教育が禁止される中、科学主義・物質主義に基づく教育が進められた。そのために日本人は宗教の価値を認めず、物質中心、自己中心、欲望追求の世俗的な生き方に流されてきた。人々は孤独・不安・虚無感・死への恐怖等の精神的苦悩を抱え、自殺率も十数年に亘って高止まりしてい

る。しかし一方で、日本を訪れる西欧や韓国の人々は日本人の宗教性に感銘を受けている事実がある。特に三・一一東日本大震災の後でも、暴動や略奪が起きず、多くの人々が他を思いやり、秩序正しく謙虚に行動したことは、世界を驚嘆させ、高い宗教性として評価された。日本人の宗教性について、国内外でこのように評価が分かれるのは何故であろうか。

藤能成は、日本人が非宗教的かつ世俗的であると指摘する。確かに韓国人と較べて、宗教団体への帰属意識が低いことは非宗教性の現われであるが、一方で、韓国に見られるような宗教的対立は少なく、秩序意識、謙虚さ、勤勉さ、誠実さ等を備えている面がある。それらは集団的秩序意識と神仏習合思想に見られる宗教的寛容性を柱とする文化的伝統と、仏教・神道を基盤とする先人達の宗教的精神生活によって蓄積された無意識的精神性だと指摘する。

那須英勝は、アメリカの日本宗教研究者の見解として、神社参拝等に見られる世俗的な空間における宗教行動の活発さを取り上げる。そして日本人は世俗的ではあるが、特定の教義に基づかない、家族や地域共同体による宗教儀礼への参加を通して、宗教的寛容性と集団的秩序を守る深い宗教性を身に付けている点を指摘する。「個人的信仰」が強調されるアメリカ社会から見ると、日本人の宗教的寛容性は驚きであるようだ。

寺本知正は、ヨーロッパと較べて、日本は国家と宗教の結びつきが薄い点を指摘する。また毎年、日本へ宗教研修に訪れるドイツ人学生達が、寺院・神社の宗教的空間の力、地蔵信仰や祭り等の教団化されない地域的信仰形態、日常的に神社に参拝

する人々の姿に、ドイツにはない深い宗教性を感じていることを紹介した。

以上のように、外国人の目には、日本人は世俗的な生き方の中にも、教団・教義に依らない習俗的な信仰心や宗教性を有していると思われる。儀礼・儀式に重心を置く伝統的な生活文化を通して、日本人はある意味での深い宗教性を身に付けているのである。

長岡岳澄は、宗勢基本調査の結果を通して、寺院関係者の主な役割は、法要・儀式を中心としており、門徒の側からも、法要・儀式を遂行することへの期待が高い点を指摘する。ただし、寺院関係者は人々に教義を伝え、苦悩に応えることを望んでおり、そこには葛藤があることが窺える。ここに那須英勝の指摘する儀式・儀礼を中心を置く日本人の志向性が確認できる。伊東秀章は、死に向き合ったガン患者への対応の仕方を質問紙調査から問うた。その結果、浄土真宗本願寺派のビハラー活動者は教義に基づく宗教性や来世観に立つのに対し、大学生は特定の信仰によらず、死後のいのちの存続に否定的である点を指摘する。これは藤能成の日本人が非宗教的だという主張を裏付ける結果となっている。

会場から「人と人との絆を結び、領土問題を平和的に解決していくためにも、日本でも宗教教育による精神の涵養が必要だ」との意見が出された。原田哲了は、日本人の宗教性を捉えるためには多面的な議論が必要であり、曖昧で無自覚な宗教的態度の中にも深い宗教性が含まれていることを指摘し、明確な結論には至らなかったが有意義な議論ができたと思括した。最

後に藤能成は、今後の日本において、外国人の目に映る宗教性を自覚し維持しながら、非宗教性と世俗性を克服するための方向性を探っていく必要性を指摘した。

ポスト世俗主義と公共性

代表者 藤本龍児

コメンテータ 荻田真司

司会 磯前順一

総論 ポスト世俗主義と公共性

磯前 順一

本報告は、「一、津波と原発」「二、アイデンティティと複数性」「三、他者とは何か」の三部から構成される。政治的公共性は、ハンナ・アレントが言うごとく、他者との複数性の場として成り立っているが、それは排除があつてはじめてその内部の平等性が成り立つものである。内部の平等性については、アレントは異なるものの平等性を説くが、実際にはたえない均質化の危険にさらされており、主体の異質性をいかに確保するかが課題となろう。同時に、排除された外部は、ジャック・ランシエールが言うがごとく、その内部に代補される余白として、不協和音をもちこむものとして参入が試みられていく必要がある。原発以降の日本社会は内部を均質化させるものとして、プチ・ナショナリズムの盛行と、その一方で被災地や沖縄

の人々がいかに社会的生存の権利から排除されているのか、グローバル資本主義が推し進める地域格差の問題が露呈された状態にある。そこでは、大都市在住のエリートら自由に移動できる人々と、地域に縛りつけられた人々、さらにはそこから無理やり引き離され故郷を喪失した人々の格差には目を覆いがたいものがある。私たちは、一方でアガンベンのいう剥き出しの生と、他方でスピヴァクのいうメトロポリタン・ディアスポラという言葉を否応なしに思い出さざるを得ないであろう。

そこでおそらく私たちに求められているのは、他者の苦痛に對する感受性であろう。それが新たな公共性を形成する基本的な感性的パルタージユを形成していくことが期待されよう。しかし一方で、アレントの言う複数性とは、そのような他者に対する感受性を持つ他者だけでなく、むしろ他者に対する感受性を欠如した多数の他者からも構成されるものである。複数性とは、アレントがいうような異なる者同士がお互いを認める理想的な関係のままには現実としては成立しえず、そのような期待と予測を抱く者の認識を超え出る、他者を認めない他者からなる世界としても構成されているのである。そのような他者をもたない他者はむしろおのれが本源的に抱える異種混濁性を恐れ、均質な共同体に溶け込もうとする。そうすることでかつて他者の苦痛に、そしてみずからの主体の抱える居心地の悪さにも感受性を麻痺させていく。震災以降の、絆という名のもとのナショナリズムの盛行と、瓦礫処理の引き受け拒否などの、社会的矛盾を特定地域に押しつけようとする弱者切り捨ての感情的な反応の共存は、まさに私たちの世俗社会の二重構造とい